

## 認知症患者の見ている世界と私たちの世界を繋ぐ看護

三回目の実習では、精神科の閉鎖病棟に入院する、認知症の患者さんを受け持たせていただいた。そして感じたのは、認知症の人はその方独自の世界があり、彼らはそこに身を置いて暮らしているということだった。その世界は、私たちが今見て感じている世界とはちょっと違う。この違いが、私たちが認知症の方と接したときに、驚きや恐れ、嫌悪の原因になってしまっているのだと知った。

私の受け持ち患者さんは、つい半月前まで、暴言や多動といった不穏症状が強い人だった。実習初日、猫のぬいぐるみを抱えながら、ぼんやりとした様子でデイルームの車椅子に座っているAさんがいた。「はじめまして、学生の〇〇です。今日から実習でお世話になります」目線を合わせて挨拶をすると、「おう、そうですか」と穏やかに返事をしてくれた。

Aさんは、往年の有名コメディアンを生まれたときからの友人だと自慢げに話す。「彼から子猫を預かったんだ」と、愛おしそうにぬいぐるみの猫に視線を落とした。

「仲のいいAさんだったから、お友達も安心して猫ちゃんを預けられたんですね」

「おう、あいつは生まれたときから一緒だったからな」

もちろんこれは、Aさんの空想の世界の話だ。ただ、テレビにも作業療法のレクリエーションにも一切関心を示さず、デイルームの窓をぼんやり眺めながら「外に出たい」とつぶやいていたAさんが、友人から猫を預かったと話すときだけは、自信に満ちた力強い声で生き生きとしていた。

認知症の方の幻視や妄想、徘徊、暴言、不潔行為といった一見不可解な言動は、病気の進行と共に、本人さえも気づかぬうちに築かれた認知の歪んだ世界で、迷子になってしまった状況なのだと思う。戸惑いながらも、彼らは精一杯生きており、患者さんの世界のなかでは、これら不可解な行動にもきちんとした理由があって、彼らにとっては十分理に合ったものなのだ。ただ、私たちのいる世界の側から見ると、少し異様に映るというだけで。今回、そんな認知症患者さんの世界を垣間見たことで、私は、彼らの世界と私たちの世界とを繋ぐ、懸け橋のような看護師になれたら良いなと思った。

私の理想の看護とは、まずはその人を丸ごと受け入れることだ。良いことも悪いことも全部、温かな気持ちで受け入れて、何をどのように支援すべきかを冷静な目で見極めていく。まだ今は遙か遠い理想だけれど、それができる知識と技術を少しずつ、でも着実に身に着けていきたい。そしていつか、患者さんが病や障害という困難な道を、一歩でも自分の力で歩いていけるよう、その道を照らす灯のような存在になりたいと思う。